

浄土 第77巻4号 (毎月1回1日発行) 平成23年5月1日発行 令和10年5月20日第2刷郵便物認可

monthly JODO

2011

5

May



法然上人讃仰会

陸奥上入を済く

二十五霊場十四番

小松谷

正林寺

◆御詠歌◆

千歳ふる

小松のもとを

住みかにて

無量寿仏の

迎へをぞ待つ

有徳の誉れ高い平重盛公のお住まいでもあったこの地、千年の歳月を経たともいわれる久遠の松のもとに住居を構え、お念仏をお唱えしてお待ちするならば、必ず、無量寿阿弥陀如来の御来迎があります。なぜならば、それはまさしく正しく定まった業であり、したがって、彼の仏の本願に順じているからなのです。

2011年表紙 雲中供養菩薩（東京白金・戒法寺蔵）

仏師 鈴木禮次朗

小松谷正林寺

正林寺は浄土宗寺院。京都市東山区渋谷通東大路東入3丁目上馬町。もとは内大臣平重盛公（小松殿）の別邸。48の灯籠を点じ念仏行道された道場、灯籠堂のあったところでしたが、平家没落の後、関白九条兼実公の山荘となりました。月輪御殿造営の際、ここに招かれた法然上人は、兼実

公の戒師として法談をし、これを静聴した兼実公は剃髪出家することとなります。法然上人は一時、居住もされたようで、元久2年（1205年）8月、法然上人が瘡（おこり）をわずらったとき、聖覚上人が修法を施したといわれています。

建永2年（1207年）3月、法然上人、讃岐流罪の折にもこの御房から出立されたと伝えられています。



法然上人鑽仰会の

本

当会発行の書籍、雑誌
のお求めは、当会へ直接
お申し込みください。

なお、月刊『浄土』を除き送料は
含まれておりません。別途実費を
申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話／03-3578-6947

FAX／03-3578-7036

こうるじっぽう 響流十方

其の二

袖山榮輝・林田康順・小村正孝

法然上人鑽仰会

響流十方 こうるじっぽう
其の二
640円(税別)

響流十方 こうるじっぽう
600円(税別)



月刊『浄土』
バックナンバー



『念佛讀本』完全復刻版
1,600円(税別)



「法然上人絵伝絵葉書」
(8枚セット)500円(税別)



※浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠二巻本」より

陸奥上人を供く

二十五霊場十四番

小松谷

正林寺

◆御詠歌◆

千歳ふる

小松のもとを

住みかにて

無量寿仏の

迎へをぞ待つ

有徳の誉れ高い平重盛公のお住まいでもあったこの地、千年の歳月を経たともいわれる久遠の松のもとに住居を構え、お念仏をお唱えしてお待ちするならば、必ず、無量寿阿弥陀如来の御来迎があります。なぜならば、それはまさしく正しく定まった業であり、したがって、彼の仏の本願に順じているからなのです。

2011年表紙 雲中供養菩薩（東京白金・戒法寺蔵）

仏師 鈴木禮次郎

浄土

2011/5月号 目次

法然上人と念仏（後篇）.....	竹中信常	4
法然上人を歩く 小松谷正林寺	高橋良和	12
会いたい人 笈田ヨシさん②.....	関 容子	16
江戸を歩く	森 清鑑	24
響流十方	林田康順	32
小説 渡辺海旭	前田和男	36
誌上句会	選者=増田河郎子	44
マンガ さっちゃんはネッ	かまちよろう	47
編集後記.....		48

表紙裏・ 法然上人を歩く+表紙の人

背表紙裏・ 法然上人を歩く小松谷正林寺



表紙題字=中村康隆前浄土門主
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎

お見舞い申しあげます

法然上人鑽仰会

この度の東日本大震災に際し、お亡くなりになられた方々のご冥福をお祈り申し上げるとともに、併せて被災されました当会会員の方々をはじめ、檀信徒の方々や関係各位の方々に心からのお見舞いを申し上げます。

三月十一日のマグニチュード九・〇という未曾有の東北地方太平洋沖大地震の発生、そして巨天津波の襲来、そして福島原子力発電所の事故という三重苦により、東北地方のみならず、関東各県にまでとてつもない甚大な被害がおよんでいます。

特にレベル七とまで判断された原子力発電所の事故は、放射能飛散によつて現在のみならず未来にまで生活に影響し、不安を膨らませています。

日本はこの災害によつて一変してしまいました。未来に夢を膨らませ大量消費していた時代は終わりました。今、この時期をしつかり認識し、今こそ法然上人が説かれたお念仏のみ教えを信じ、ともどもにお念仏を称えて、お亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りするとともに、今の自分の心を励まして、今を見つめてゆきましょう。

合掌

平成二十三年五月

浄土誌上ライブラリー 昭和三三（一九五八）年「浄土」二月号より

法然上人と

念佛

（後篇）

竹中信常

1919年
1936年

東京生

大正大学宗教学科卒

大正大学名誉教授・大正大学・仏教

大学講師

浄土宗教学院研究所長を歴任

主要著書

タブーの研究、仏教—心理と儀礼—、

宗教心理の研究、宗教学序説、宗教

儀礼の研究、日本人のタブー、日本

人と仏教、選集に聞く、仏教への

問いかけ、現代宗教学の理解、極楽

浄土を想い観る

マレット・宗教と呪術

翻訳

東京・白金 隆崇院住職

平成4年6月11日 遷化

享年78才

仏さまの目には みんなが平等

どうして、御上人様のお念仏が、ほかの人々の念仏よりすぐれてないことがありまじょうか。この答えをきいて、法然上人は、いまだに、自分の本意が弟子達にすらわかっていないのをなげかれて、丁度その折、愚かではありますが、一生懸命に、念仏の道をはげんでいる阿波の介すけという男が、ほうきで庭を掃いている方をお示しになりながら、「本願の念仏の趣きを未だ心得られざるなり。かの阿波の介の念仏も、源空（法然上人のこと）の念仏も、全く以つて同じ念仏なり。助け給え阿弥陀仏と思うより外に、別の念いを置かず」とおさとしになりました。

法然上人は、念仏すること、ありのままなる世界に素直に随順して行く生活において、人間の平等を発見されたのであります。いうならば、西洋において、ルネサンスに至って始めてとなえられたヒューマニズム、即ち、人間の本性の平等、自然のままの現実生活を素直にうけ入れて行こうとする思想を、法然上人は、それよりもはるか以前に、念仏為本、念仏をもとになすという信仰の上に、美事に、樹立されたのであります。

ですから、人間は、念仏の生活を押しすすめて行きさえすれば、阿弥陀仏の救いの手はすべて平等に下って、阿波の介も、法然上人も、すべてひとしく仏のお国、極楽浄土に生れることが出来るのである。従って、念仏の生活とは、それぞれの生活の中で、あるいはそれぞれの生活の上で、念仏を称えるというのではなしに、あらゆる人が、同じく、南無

阿弥陀仏となえる、その念仏の中にこそ、本当の人間生活が打ち建てられて行くことをいうのであります。こういったところにこそ、法然上人のいわれる、念仏のヒューマニズムがあるのであります。

その当時、法然上人は色々の人について、当時の仏教の学問を研究して、あらゆる宗派の教義を理解しました。が、どうしても納得なつとくの行かないことがある。それはどういうことかと申しますと、どの宗派の教えをみても、一番肝心かんじんなものがぬけている。それは、愚かな者、罪深いもの、自分の悪業に苦しんでいる者、いつてみますならば、一番仏のすくいを必要とするもの達、しかも、人間の社会では、こういった人達が一番多いのに、これをぬきにして、むずかしい理屈や、やりにくい修行をすすめる。これでは、いつまでたつても、仏教を世間の人のものにすることは出来ず、一般の人にもすぐわれないじゃないだろうか、ということなのです。

頭脳明晰せきな法然上人は、もう、人にきいても無駄だとさとりまして、自分ひとりで、この納得の出来ない問題にぶつかっていったのです。数千巻もあるという大藏経も、三回、四回とくりかえしてよんでみました。経藏の中にもって、夜も眠らずにはげみました。丁度、その頃、京都では木曾義仲が乱を起して、今にも攻め込もうとしていて、物情騒然たるものがありました。こうして、法然上人は、京の町を中心に行われた源平の合戦もよそに、ひたすらに、おのれの問題の解決にむかって、まい進されて行ったのであります。ただ、木曾義仲が京都に乱入した日だけは、あまりまわりの者が心配するので経藏から出て、裏山に入って難をさけたと伝えられております。

御苦心の結論は 一枚起請文

このように、骨をけずるような苦心、研さんの結果、法然上人は、一つの結論に到達されたのです。それは、前に書きましたように、どんな人でも、仏の目からみれば、みんな平等だという、宗教的ヒューマニズムを唱えられたのですが、それならば、どんな点が平等なのかというと、むずかしくいえば、人間性の本質は何か、ということなのですが。

「われは烏帽子えぼうしを着ざる男なり、十惡の法然房、愚痴の法然房が、念仏をして往生せんと
いうなり」

「法然上人のたまはく、われはこれ無智の身なり、われはこれ破戒の身なり。……」

こういわれたのです。勢至菩薩や、文殊菩薩にもくらべられるほど、明晰な頭脳を持つた法然上人でも、仏の前に出ては、無知愚鈍なやからにほからないのです。いや、人間の小さかしい智慧とか、はからいなんてものでは、到底はかり切れないものが、仏というものなのであります。そこに気づかれたのです。それですから、もう、何もいえないし、何をしても無駄なこと。ただ、一心に、心の底から、仏を念じ、仏の名を称えるほかに、私共、人間としてすべきわざはないのであります。

念仏を称えるということは、自分の愚鈍罪業についての自覚を裏づけとして、その上に、仏の広大無辺の慈悲を仰ぐことに外ならないのです。むづかしい言葉で申しますならば、自己を否定することによって、逆に、一そう大きい真実の自己を見出してゆくことと申せ

ます。

こうした自覚は、口では簡単に説明することも出来ませんが、実際にすることは、非常にむづかしいことです。法然上人のように、人なみすぐれた頭脳を持ち、数年間に及ぶ、血のにじむような苦心の末に、はじめて得られるもののなのです。しかも、そのような偉大な法然上人が、御自分のことを、愚痴の法然房とおっしゃった。ここに法然上人の自己否定と、念仏によって生きて行かれた自己肯定とが、一枚の紙の裏表のようにみられるのであります。私共は、法然上人の得られた、人間性の結論から出発すればいいのです。念仏を申すことから出発するわけです。それ以前のことは、私共には、出来もしませんし、またする必要もないわけです。

法然上人は、建暦二年一月二十五日、八十才でなくなりました。昭和三十六年がその七百五十回忌に当るわけですが、その臨終の二日前、弟子の勢観房源智という人の求めに応じて、念仏についての心得を、半紙一枚に書いて渡されました。

「もろこし我朝に、もろもろの智者達の沙汰し申さるる観念の念にもあらず、また学問をして念の心をさとりて申す念仏にもあらず、ただ往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申して疑いなく往生するぞと思ひとりて申すほかには別の子細候はず……念仏を信ぜん人は、たとひ一代の法をよくよく学すとも一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智のともがらに同じうして、智者のふるまいをせずして、ただ一向に念仏すべし」

これが「一枚起請文」といわれ、浄土宗で一番大切な心得とされているものです。

法然上人はこうして、仏教というものを、信仰というものを智者や学者の手から、何も知らぬ、何もわからぬ、愚鈍の人々、即ち一般民衆の手へとお渡しになったのであります。

流罪すら 仏縁と喜ばる

そのために、仏教を売物にし、出家を職業と心得ていた一部の僧侶からは、はげしい反対がとなえられました。高遠な仏教を墮落させるものだとか、念仏だけでよいというのは、折角、釈尊がお説きになった八万四千の法門を、全部無駄にしてしまうのだとか、愚民をまどわす邪法であるとか、色々の非難があげせかけられました。そして、とうとう、讃岐の国（現在の香川県）へ流罪に処せられました。しかし、その時にも、法然上人はこう申しておられます。

「流刑さらにうらみとすべからず、そのゆえは、おむす齡すでに八旬（八十才）にせまりぬ。たとひ師弟同じ都に住すとも、娑婆の別離近きにあるべし。たとひ山海をへだつとも、浄土の再会、何ぞ疑はん。……しかのみならず、念仏の興行、洛陽（京都）にして年ひさし。辺びにおもむきて田夫野人をすすめんこと、年来の本意なり、……この法の弘通、人はとどめんとするも、法さらにとどまるべからず……」

流罪をうらんではならない。私も、もう八十に近い。一緒に都に住んでも、もうすぐこの世でのお別れが来るのだ。たとえ離れ離れになっても、仏の国浄土で再び会えるじゃないか。……それだけではない。念仏の教えは、京都ではもう長い間やって来た。しかし、遠い辺りないなに行つて、お百姓や漁師たちにこそ、この教えをすすめることこそ、私の年来の希望だったのだ。

流罪されることによって、念仏のありがたさを、未だ知らぬ、地方の人々へも、教えることの出来ることを、むしろ喜んで出かけられたのであります。

こうして、法然上人は、あくまでも、仏教を大衆のものとし、一般の人々のものであると確信されていたのであります。いや、法然上人自身、私共大衆の間にはいり、大衆の一人として生きられた方なのです。ですから、生涯、お寺というものを建てることをされず、常に、町中の普通の家に、人々と軒を並べて住まわれました。病い重くなつた時、弟子の法蓮房が、

「昔のえらい方々には、みんな遺蹟があります。しかるに、御師匠様はまだ一軒のお寺もお建てになつておりませんが、若しお亡りになったら、私共はどこを遺蹟と定めて、お参りしたらよろしいのですか」とたづねました。

これに対して、法然上人は、

「あとを一廟にとどむれば遺法あまねからず。余が遺跡は諸州に遍満すべし。ゆえいかなとなれば、念仏の興行は愚老一期の勸化^{かんげ}なり。されば、念仏の声するところ、貴踐を論ぜず、海人漁人のとまやまでも、みなこれ余が遺跡なるべし」と申されました。

念仏の声のするところ、どんなにかなにも、どんなに貧しい家にも、どんな罪深い人の心にも、法然上人は、今も生きておいでになるのであります。

(おわり)

講師

梶村 昇

いのちの無常と 来世への希望

かじむら のぼる

元亜細亜大学教授

著書

日本人の信仰—民族の「三つ子の魂」

法然のことば

法然の言葉だった「善人なをもて往生をとぐいはんや悪人をや」

弁長・隆寛 浄土仏教の思想

勢観房源智（念仏に生きた人）

日本のまごころ—聖徳太子

森と水と大地—アジアの自然を考える

ほか多数

会場 東京芝**大本山増上寺 慈雲閣1Fホール**

6月24日(金)

午後**1:30**開場 午後**2:00**開演(3:30終了予定)

会費 **1,000円**

当会会員無料

問い合わせ先

—法然上人鑽仰会—

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階

電話 03-3578-6947 FAX 03-3578-7036

法然上人を歩く

二十五霊場十四番

高橋良和著 『法然上人紀行』(探究社)より抜粋

小松谷

正林寺

京都には七野といって野のつく地名が七つある。その一つに鳥辺野というのがあるが、今の東山五条、西大谷のあたりで、鳥辺山と称している。昔はこの地は風葬のあったところで、化野(あだしの)蓮台野(れんだいの)などとともに知られている。その鳥辺野の南に小松谷正林寺がある。詳しい地名は、京都市東山区渋谷通り東大路東入三丁目上馬町というところである。この正林寺は東大路の渋谷で市電をおりて、東へ約三百米ほどいったところであるが、

その道の突きあたりの南側に立派な山門がある。

円光大師旧跡という石柱が目につく。この正林寺は平重盛の邸宅であって、重盛はこの小松谷の近くに灯籠堂をつくっている。平家物語のなかに、

当事の浮沈を歎いて、東山の麗に、六八弘誓の願になぞらえて、四十八間の精舎を建て、一間に一つ、四十八の灯籠を掛けられれば……

とあるから、浄土信仰に徹した人であって、その臨終のときにも法然を迎えて善知識としている。重盛はこの地でひたすら念仏したのであって、今様に、

心の闇の暗きをば灯火の火こそ照らすなれ、弥陀の誓をたのむ身は、照らさぬところなかりけり、

といううたをうたって、日々念仏行道したといわれている。然し悲しいかなこの重盛も、平家一門の没落とともに亡くなり、この邸宅は後に九条兼実の山荘となったのである。

九条兼実も法然に皈依したので、兼実が月輪殿を建てたときに、法然のために堂宇を建て、東山々麓の吉水の庵室から法然を迎えてしばしばここで法談をした旧跡でもある。附近には清水の滝山寺という阿弥陀堂があり、それにつ

づいてこの小松谷があるので、おそらく法然は、東山づたいにこの阿弥陀堂から小松谷にしばしばきていると思う。

珍しいことがある。法然には持病があった。それは「おこり」というマラリヤの一種である。文久二年（二二〇五）に法然はここでその持病のおこりにかかっている。そのとき、兼実の命をうけた聖覚法印せいかくほういんがここで、説法をしてその持病の退散を祈っている。九条兼実と法然の出会い、兼実の日記玉葉をみるとわかるので、文治五年（一一八九）八月一日に、

今も法然房の聖人を請じ、法文語及往生業を読む。

とあり、その次は八日に、

法然聖人來りて授戒、その後念仏を始む。

とある。このころに兼実も出世して摂政になっているから、飛ぶ鳥もおとす勢であったことがわかる。

法然は小松谷が非常に気に入ったらしいので、この地を自分の最後の場所と考えたらしく、四国に流罪に出発する際も、ここから出発をしたので、その一夜を兼実とともにここで明かしたとつたえられている。

その別れのときに、

ふりすて、ゆくはわかれのはしなれど、ふみわたすべ

きことおしぞおもう

と兼実が詠じたに対して、法然は、

露の身はこ、かしこにてきえぬとも、心は同じ花のうて
なぞ

と返歌があった。小松谷正林寺の境内は広い。庫裡につ
づいて御影堂がある。寺内で保育園を経営しているので、
昔の姿と多少雰囲気異なるが、御影堂には法然の御影と、
兼実と浄土宗の二祖の鎮西聖光の御影が安置されている。

正林寺は、応仁の乱の兵火にかかり、全焼したのが、正
徳年間（一七一―一七五）に、義山の弟子の恵空が復
興している。

ありがたいのは、法然の御影で法然が流罪をうけて四国
に赴き、やがて勅免をうけて帰洛の際、讃岐においてつく
ったところの自作の像である。それがまわりまわってこの
寺の本尊となったのである。

連載

会いたい人 関 容子



お
い
だ
筈
田
ヨ
シ
さ
ん
②

撮影／タカオカ邦彦

パリに渡った筈田さんは、ピーター・ブルック演出の芝居に出演し、「本当の演出家を見た」という気がした。

「それが68年で、日本へ帰ってしばらくした70年のはじめに、ピーター・ブルックから手紙が来たんです。この秋から演劇の研究団体を発足させるが、世界中から演劇人を募る。研究期間は三年間。センターをパリに置く。君も来ないか、というもので、三年は長いなあと思いましたが、しかし三年たてばまあ何かが開けるだろう、と参加を決心しました」

筈田さんはその年の六月にまだロンドンにいるピーター・ブルックのもとへ旅立つのだが、出発の前日、三島由紀夫夫人から饒別の贈り物が届けられた。

「その日がぼくの一人芝居の楽日で、新宿の蠍座に出てました。これも三島さんが作者の堂本正樹さんに推せんしてくれて実現したものなんですけどね。贈られたのは多額の饒別と、麻の甚兵衛と、手紙が一通……」

毛筆で書かれたその文面は「英京龍動に於ても、この甚兵衛を着用して上方風日本精神を忘るゝこと勿れ。筈田君、三島由紀夫」だった。

「上方風」というのは、よく三島御夫妻が、神戸生まれのぼくの顔は本当に関西商人の顔だ、典型的な贅六だ、とからかったからなんです。そもそも三島さんと知り合えたのは、文学座に研究生として入ってすぐ、ボクシング部に入学して、先生はそのボスだったわけです。『サロメ』のナラボトという大役を駆け出しのぼくが演出の三島さんから仰せつかった理由ですけど、あとで思うには、あのころ三島さんは文学座の芝居に冗談でその他大勢の役にとときどき出てましたよね。ぼくは下っ端の研究生だったから、その他大勢でいつも出てました（笑）。すると三島さんの出てない日も、昨夜も出てたね、って知人からたまに言われたらしい。ぼくが先生に似てるのを御存じだったんで、ナラボトという派手に自決す



「三人姉妹」を演じる若かりし頃の筈田さん

る役を、まず自分に似た若者にやらせてみて自分を投影させて……舞台稽古のとき血の量が少なくて迫力が出ない、もつと血を出せ、って小道具に注文をつけてましたからね。次に御自分が『憂国』という映画で青年将校の切腹の場面を豚の内臓なんか使ってリアルに演じてみせて、最後が本番だったんだろうと思うんです。先生の自虐趣味、自殺願望症は、ぼくはよく理解できません。何しろ先生は少年のころ、サン・セヴァチャンが矢に刺されて殉教する絵を見て、興奮して射精した、って書いてますからね」

笈田さんに餞別が届いた日の翌朝、空港へ出向く前に三島邸を訪ねたが、「主人はまだ寝てるのよ」と夫人に言われて、会えなかった。

「それから半年もたたないで三島事件が起きるんです。最後に会ったのはブルツクのもとで三年間演劇修業をします、と報告に行ったとき。乃木坂でステーキを御馳走になっ

たんですが、そのことは誰にも言わずにそつと出発しろよ、日本は怖いところで嫉妬されると何を言われるかわからない、俺はもう何もかも終ってしまったから、かまわないんだが……という言葉が妙にひっかかりましたけど」

三島の死を知ったのは、バリのルクサンブール公園にほど近いピーター・ブルツクの家でだった。

「ぼくはその建物の最上階、六階の召使い部屋みたいなところに居候してたわけですけど、十一月二十一日の朝、一階のキッチンに降りて行くと、ブルツクが新聞を読んでいた、ミシマがハラキリをやつて、彼の友人がその首を切ったよ、と言うんです。ぼくはいつかはこうなると予測はしていたんですが、三部作の最後の『豊饒の海』の新潮連載が終らないうちは大丈夫、と油断してたんです。でもあれは最終回の原稿を新潮社に渡した直後だったんですね。人間は、生れてから何一つ自由

がないが、唯一の自由は自分の命を絶つことだ、とかねがねおっしゃっていて、そのことを遂行したわけです。ぼくにも四十歳くらいまで自殺願望がありました。でもぼくの場合は、これからの行く先が不安だったり怖かったりして、死んだほうがいいや、という程度のものでしたけど、先生のは芸術の完成のためには自分の肉体を消してしまわないと……という考えも一つにはあったと思う。あの自殺願望が何かの拍子にヒョロツと変ってくれたらよかったのにな、と思いました。今年で没後四十年、生きていたらしゃれば八十五歳。まだまだでしたのにね」

若いころ三島由紀夫に似ていると言われた笈田さんだが、今の風貌は風雪をへて、漂泊の魂を内に抱えた武芸者、雲水、吟遊詩人のように見える。

また、何年か前、映画『豪姫』（宮沢りえ主演）で勅使河原宏監督が晩年の豊臣秀吉役

をつけた配役の妙にも感じ入った。

その後、『四谷怪談』と銘打った、ヨッシ・ヴィーラーが演出する現代劇（平成十七年）に、笈田さんは按摩宅悦に当る役で出演。日本語のせりふの舞台はじつに三十七年ぶりだった。

このとき共演した吉行和子さんは、出番の前に腕立て伏せを何回もやって身体を鍛えている笈田さんを見て、「世界を一人で生きてきた人はさすがにすごいな」と思ったそう。そして去年十二月の『春琴』の佐助役で出ている笈田さんの舞台姿に、私は深い精神性と静かな孤独感が漂うのを見た気がして、強い感銘を受けた。

「そう言うってくださったので、ぼくは思い出す話があります。パリで、神主さんや武道家、能楽師を招いて日本文化をテーマにしたワークショップをときどき開いていたのですが、今度は座禅を取り上げてもいいんじゃないかと思って、三島先生のお母さまは禅にくわし

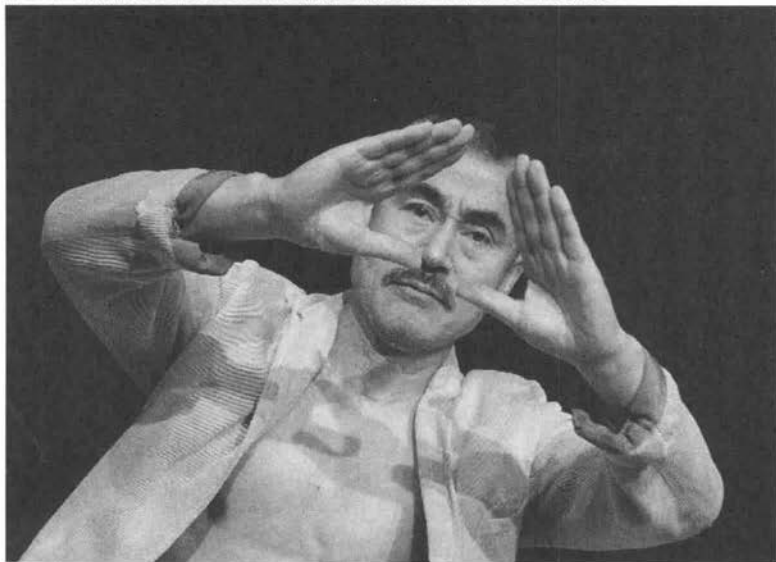
い方なのであるとき紹介をおねがいしたんです。それで名僧として名高い三島の龍沢寺りゅうたくじの中川宗淵そうえん老師を訪ねることになった。三島駅からタクシーに乗って、ここから先は歩いてください、と山門前で言われてだいぶ歩いてはるか下に三島の田んぼが見えて、ずいぶん登ったんだな、と思つてね。夕闇が迫つてきて、心細くなり出したら向うにポツンと明りが見えて、ようやくお寺に着きました。囲炉裏のある部屋に通されて、やがて老師がいらしたので、是非ワークショプの講師に老師のお弟子さんを、とおねがいすると、考えておきましょう、あなた、お茶を上がりますか、とおっしゃる。禅宗では、お茶をたててやりとりするのが習わしで、それでどちらの心の位が高いかが自ずとわかる、と聞いていて、もちろん最初から勝負する気なんかないんだけどね。そうしたら、ああ、今日はこの茶碗の中にたくさんのお星様が出ました。これを全部飲み干しなさい、と言われた。薄

茶の泡つて普通小さい泡なんだけど、その夜は五ミリくらい泡がいっぱい出て、明らかに照らされてピンクやグリーンに輝いて星のように見えるんです。それで僕はお星様を飲み干すつもりでいたのだら、次は祭壇に案内されました。等身大の二人のお坊さんが、黄金の玉を片手で持つている彫像があつたんです。あの玉はなんでしょうか、と訊ねたら、あなたの魂です、って」

笈田さんの語りは、一人芝居のよう。

「庭をごらんなさい、と老師がスツと戸をあけて、これは芝居装置より立派でしょう。水の音も美しくてとおっしゃるので僕は、ええ、しかし今は十二月なのにあつたかいですね、三島はいつもこうですか、と伺うと、あなたの心があつたかいからです、なんて（笑）。何を訊いても参るわけですよ。では、タクシーのくるところまで送ってあげましょう、と連れ立って山道を下りながら、ああ、今日はお星さんがいっぱい出てる。あなた、ときど

約10年の構想期間を経て1979年に初演されたのが一人芝居の「公案」だ



きこうしてお星さんをごらんになるといいです
よ、つて。その時、僕はサハラ砂漠に行
て綺麗な星を見た夜のことを思い出しました。
老師はそれから『南大菩薩』と唱えることを
教えてくださったつて、一緒に大きな声で唱え
ながら歩いたら、自然に涙がこぼれてきました。
講師依頼の件はそれつきりになりましたけど、
帰りのタクシーに乗ったら、さつき乗ったと
きの自分とは明らかに変わってるわけですよ」
ただ感心して話に聞き入っていたら、笈田
さんはズバリと本題に入る。

「お客は、劇場に入るときと出るときと変わ
てなきやいけない。誰が変わえるのかと言えば、
役者が変える。あの老師はすごい役者だと思

いました。あんなウソ八百みたいなことばかり言って（笑）、ぼくに感動の涙を流させる。ぼくはすぐ立派なものをいただいたんだと思います。僕も中川老師のようなスゴイ役者になりたいと思いました。ああいう老師様になると、相手がほしいと思ってるものをスツと差し出す才にたけてるんじゃないか。人間で、無意識のうちに自分が聞きたいとこだけ聞くんですよ。見るのも、見たいものを選んで見てる。だから人に会ったときに本当に親切なのは、その人がほしいと思ってるものを差し上げることだと思ふし、舞台でも観客に媚びるんじゃないくて、役者が差し出すものによつて、今日よりも一段上のレベルに行ければいいな、と思うんです。役者も観客もお互いに」

笈田さんは、この日まさに私の欲したものをちゃんと差し出してくれた。多くの言葉の中から私は聞きたいところを聞き、見たいところを見たに過ぎないのかも知れないけれど。

「ぼくは禅の公案をお客さんに訊いたりするワンマンショーをここ三十年くらい演じてるんですけど、この間ニューヨークでやったとき、友だちが、前に見たときより年をとったからともちろん身体は動かなくなってるけど、なんだか癒される気がしたよ、と言ってくれて嬉しかったです。うまい役者になったといふのはテクニクを褒められたことになるけど、いやされると言われたときに、昔、そういう役者になりたいと思ったことに少しでも近づけたかな、と思えて嬉しかった」

笈田さんが静かな声で続ける。

「芝居なんて、もともとたいしたものじゃないし、それより人間としてどう生きていくかが重要で、お客さんと人生の一部をわかち合つて、心の掃除をしてもらうのにいくらかでも役に立てればいいな、と思ってるんです」

（つづく）

第三十九回

江戸を歩く



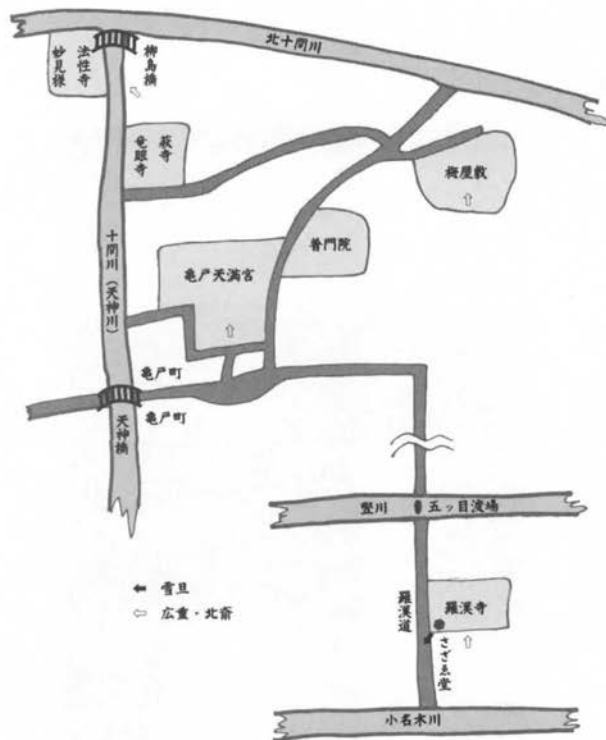
深川木場に向かつて歩く

森清鑑

大江戸ウォーカー

龜戸・十間川往来

大川（隅田川）から堅川に入漕ぐ。四つ目の橋を潜ると、左代町の家並みで、右岸は、猿江である。そこは五万五千坪、縦な材木集積地。巨大なブルのような水場は、地面によつていくつかに区画され、各水場には多数の材木が浮んでいる。この御材木蔵地の右沿いを縦、南北に流れる川が十間川（南十間川）である。堅川との交点、右手に御材木蔵地を見て、船を左に曲げ、十間川を北上する。旅所橋を潜ると、左右は亀戸村の畑と大名の抱え屋敷が見える。さらに船を進めると辺りは亀戸町の家並みに変わり、天神橋を通過する。右側に亀戸天満宮がある。



やがて十間川は北十間川と交わる。そこに又兵衛橋（柳橋）が架かっている。橋の左岸に、江戸で有名な会席茶屋「橋本」の風格に満ちた屋敷と妙見大菩薩、法性寺の朱塗りの塀が見える。

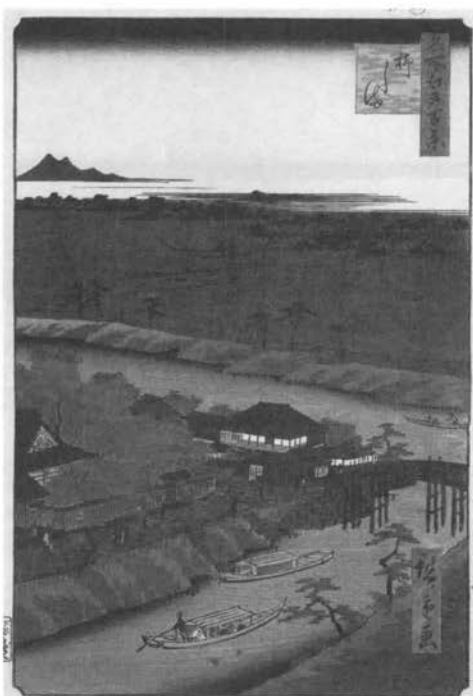
◆散步図

妙見様

清流が交叉して流れ、松と土手の緑の中に妙見様の朱塗りの塀が鮮やかに映える。北十間川の北には、広々とした原野、畑が広がり、遙か彼方に筑波山が浮かんでいる。広重も雪旦もこの光景を描いている。

江戸人にとって妙見様といえば、この妙見大菩薩、法性寺（日蓮宗）のこと。北辰妙見大菩薩は、危難除け、福寿招来の御利益があるとされ、江戸中の人々に親しまれた。北辰とは北極星のこと。北極星を神格化したもの。歌舞伎役者、中村仲蔵も絵師、葛飾北斎も大の信者であった。北斎にいたっては、北辰菩薩の北をとり、北斎と名乗るようになったのである。

歌舞伎忠臣蔵のちよい役、定九郎を一躍スターに変えた、初代中村仲蔵。落語に「中村仲蔵」がある。明和三年（一七六六）、中村仲蔵は忠臣蔵五段目の斧定九郎役をふられた。



当時、この役は人殺しをする、映えない山賊姿の端役。登場時間は今も同じだが僅か十分足らず。どうでも良いので、この間、江戸の観客は弁当をつかった。定九郎は仮名手本忠臣蔵で、同じ赤穂藩の幹部でありながら大石内蔵助に反し、敵方に通じる大野九郎兵衛の

◆広重画「柳島」十間川船風景、左岸に妙見様と料亭「橋本」。上に筑波山。

息子で悪人という設定。娘お軽を祇園に売って拵こしらえた大切な五十両を所持する父親を京阪山崎街道の暗闇で殺し、金を奪った後、猪と間違えられてお軽の亭主、早野勘平に打たれて死ぬ、さえない役。セリフは奪った金を数えて「五十両」とつぶやく一言のみ。仲蔵落胆。これまでの山賊の風体では誰も見てくれまい。客が弁当を食う時間だ。しかし、これからがえらい。仲蔵は定九郎の新たな「こしらえ」に工夫し始める。善い工夫ができますようにと柳島の妙見様に日参し、祈願。善い知恵が浮かばぬままとうとう満願の日を迎える。がっくり肩を落とし、天神橋を右に曲がり、とぼとぼと帰路につくと、いつしか法恩寺橋。雨が降ってきた。蕎麦屋で雨宿りしているところ、一人の浪人が駆け込んでくる。年の頃は三十二、三。さかやきが森のように生え、着ているものは黒羽二重の袷あはせの裏をとっている。茶の帯を締め、これに艶消しあやせの刀を落とし差し。尻をはしより、雪駄せうたを腰

にはさみ、破れ蛇の目傘をほんと放り投げ、さかやきをぐつと押さえると、しずくがたらたら。そのいなせな姿に、これだと仲蔵ひらめいた。羽二重を羊羹色にし、帯を白に、刀は舞台映える朱鞘に、足下は雪駄から草履に変える。出番直前、水を頭からかぶり、水のたれるなりで見得を切る。初日の客はあまりのできに、ただ息を呑む。弁当どころではない。場内、水を打った静かさ。あまりの静かさに、これは受けなかった、やはり無茶なことやって失敗したと勘違いした仲蔵、家に帰るともう江戸にはいられないと女房に旅支度させているところに師匠の中村伝九郎からすぐこいと知らせ。行ってみると師匠は定九郎の工夫をべたほめ。なにしろ大変な評判となり、座の表方は客をさばくのにてんてこまい。後世に名を残す名優中村仲蔵の誕生である。現在も定九郎の場面は仮名手本忠臣蔵の一大見せ場である。舞台で見た団十郎のかっこよさ。悪の美を一瞬に表現した歌舞伎な

らではの所作である。泣かせたり、笑わせたり、正蔵、円生といった落語界の巨匠がこの断を得意とした。

萩寺

妙見様にお参りして会食茶屋「橋本」で食事を楽しんだ後、柳島橋を渡り、十間川に沿って南に下る。左手一帯は、柳島村の田園。のどかな美しい風景である。と直ぐに萩で有名な竜眼寺（天台宗）がある。江戸時代、全国から萩を集めて境内に植えたところから「萩寺」と人々は呼ぶようになる。秋、人々は庭園のあちこちに咲き誇る萩を愛でる。町人、男女を問わず、武士の姿もある。幅広の縁台の上に座り、酒宴を上げている人々の姿もある。萩寺は、文人墨客にも好まれた、江戸名所の一つでもある。芭蕉もたびたび訪れている。「ぬれて行 人もおかしや 雨の萩」。



梅屋敷

竜眼寺前の道を東に歩くと北十間川の側に梅屋敷がある。亀戸梅屋敷。元は呉服商、伊勢屋の別荘「清香庵」。三百本以上の梅の木が植えられ、江戸で名高き梅見の名所であっ

た。八代吉宗公や水戸光圀公も訪れた、この名園を広重が描いた。この絵は、彼の風景画の中でも最高傑作といわれる。その情景は、近くに梅の太い幹とばらばらと咲く梅の花を描き、遠くになるに従い、梅花咲き乱れる光景と、その下に大勢の梅見の人達が小さく描かれている。背景は、上半分は鮮烈な朱色の空、下半分は台地の淡い緑色に分かれる。その高度な色彩構成は見事である。ゴッホがこの絵を模写し、印象派の画風に取り入る。海外で、最も広く知られている名画である。

梅を愛でて、屋敷前の道を南に下る。道の右側は、弘前藩津輕越中守抱え屋敷の堀。ほどなく普門院（真言宗）に着く。表門を潜ると広い境内。右に慈眼水（加持水に使用）、左に瀟洒（しょうしゃ）なお堂と方丈が並んで建っている。この寺は、当初、隅田川、綾瀬川、荒川が交叉する通称、「三股」にあったが、元和二年（一六一六）、亀戸村に移転する。その際、三股を出たところで隅田川に梵鐘を落としてし

まった。そこから人々は「鐘淵」と呼ぶようになる。ここには「野菊のとき君なりき」で著名な作家、伊藤左千夫の墓がある。

亀戸天神

普門院寺域の南西は、亀戸天満宮に隣接している。天満宮の東堀に沿って南に下る。この道は天満宮の南半分を囲んでおり、その中央にある、総門に出る。通常、江戸っ子は、十間川の天神橋を渡って参詣する。滔々と流れる十間川に小振りの屋形船が行き交っている。天神橋を渡ると左右は亀戸町の家並み。密集した家々は、きつちりと区画されている。茶屋も多い。道幅はさらに広がり、広小路状になる。その広場の左手に大鳥居が立っている。潜ると前方に総門が見える。総門がある通りは、先ほどの普門院から来る道である。門を挟んで石垣が天満宮を囲む。石垣の内側に松の木が並んで立っている。境内に入ると、眼前に有名な太鼓橋が見える。ほぼ四角の池

を藤棚がぐるりと囲む。夏になれば藤の花が咲き乱れ、その下で、人々は縁台に腰掛け、花を愛でる。大変な人出は、江戸随一の光景。池の北先に横三間半、縦幅二間の楼門が立ち、瓊門（けいもん）（門の左右に回廊がある）形式になっている。潜ると細い石畳の参道。再び正方形の広い境内が開ける。奥に本社がでんと控えている。本社の右裏手には別当の棟が連なる。境内の周囲には茶屋がいくつもある。左手を見ると裏門。十間川に船を着けて、石段を数段登り、家並み、茶屋、鳥居を抜け、裏門からも境内に入ることができる。

正保三年（一六四六）、太宰府天満宮の宮司が御神木の梅の木から菅原道真公の像を彫り、もともと在った、亀戸天神塚にやって来て、これを祀る。亀戸天神社の始まりである。それから十七年後、深川、亀戸の開拓に伴い、一帯の地神として幕府から広い寺領を与えられ、太宰府天満宮に模して造営がなされた。以来、東の太宰府として「東宰府天満宮」、



「亀戸宰府天満宮」と呼ばれるようになる。江戸後期には通称「亀戸天満宮」で、現在は「亀戸天神社」である。

学問の神様、菅原道真公にちなんで学業成就祈願、家内安全など厄除け祈願、七五三、成人祝など人生儀礼などがさかんに行われる

◆広重絵 亀戸天神境内 池、藤棚、太鼓橋

ようになる。年間を通じていくつもの行事が開催されるが、とりわけ有名なのが「うそ替え神事」である。ここでは鳥の木彫が主役。鳥の名は「うそ鳥」。日本海側に生息する雀科の鳥。「うそ」とは、古語で口笛を意味する。その悲しげな鳴き声は古くから愛されてきた。この鳥が害虫を駆除するということで、五穀豊穡をも願う太宰府天満宮で珍重された。「うそ」を漢字で書くと「鶯」。これがまた学問の「學」に似ている。菅原道真公は学問の神様。そこで二つの御利益を祈願する行事となる。一月二十四、二十五日の「うそ替え神事」では、うそ鳥を象った木彫が使われる。頭は黒、丸い白粹に黒点の目、嘴の下は赤の模様。参詣人は社務所でこの「うそ鳥」を買い、前年のものを返す。この取り替えてこれまでの悪いことが「うそ」になり、新しい「うそ」で一年の吉兆を招くという行事である。「うそ鳥」は檜作りで、神職の手で一体一体心を込めて作られる。今では、素朴だ

が美しい郷土芸術となっている。

境内には道真公を偲んで梅の木が沢山植えられた。しかし、それに増して著名なのが藤である。広重は池の前から太鼓橋を望み、咲き乱れる藤の花を描いた。この絵はフランス印象派に影響を与える。モネは自邸に日本庭園を造り、太鼓橋に似た橋と蓮の花を描いた。江戸市民だけでなく、文人墨客がこぞって遊興したわけである。

【参考文献】

江戸名所図会 角川書店
広重の大江戸名所百景散歩 人文社
広重・北斎の富嶽三十六景筆くらべ
その他 人文社

問うていわく。つねに念仏の行者はいかようにかおもい候べきや。
答えていわく。あるときには世間の無常なる事をおもいて、この
世のいくほどなき事をしれ。ある時には、仏の本願をおもいて、
かならずむかえ給えと申せ。ある時には、人身のうけがたきこと
わりを思いて、このたびむなしくやまん事をかなしめ…。

〔十二箇條の問答〕

ある人が次のように尋ねました。「お念仏の行者は、日頃、どのような思いで
いるべきでしょうか」と。そこで法然上人は次のようにお答えになりました。
「ある時には、世間が無常であることと見定め、この世での寿命などいかほどでもな
いと思ひ知りなさい。またある時には、阿弥陀さまの本願に思ひをいたし、必ず
やお迎えくださいと願ひなさい。またある時には、この世に人として生を享ける
ことが極めて希であるとの道理をわきまえ、この一生を虚しく終えようとしてい
ることを悲しみなさい…」と。

人身のうけがたきことわりを思いて―前を向き、力強く生きていく―

平成二十三（二〇一一）年三月十一日。この日は、すべての日本人が終生忘れ得ない一日となり、その日に起きた出来事は子々孫々に末永く語り継がれていくことでしよう。東日本大震災にあたり、お亡くなりになられた方々の速やかなる浄土往生を祈念し、あわせて、かけがえのない方を亡くされ、あるいは、大切なものを数多く失われた方々に衷心よりお見舞い申し上げます。

地震直後の大津波がありとあらゆるものを次々と呑み込んでいく映像を目にし、テレビや新聞を通じて、あるいは、直接・間接に伝えられる凄まじい被災状況と多くの方々の筆舌に尽くせぬ辛苦を耳にした私がいったい何をどのよう語ればいいのか。どれほど美文であろうとも綺麗事に聞こえ、言葉を尽くした励ましであろうとも虚しく響いてしまうであろうと臆病になっている自分があります。その一方、やはりこの大震災について何も語らないわけにはいかないという思いを抱いている自分もいます。仲間と共に本誌に連載の場を与えられてから丸十五年、ここまで思い悩んだのははじめての経験です。

私事で恐縮ですが、その時、長野県駒ヶ根の寺院で法話をしていた私は、大きな揺れを感じて何度か法話を中断せざるを得ず、電車も不通となり、結局その日は帰ることができず、翌日の夕刻、名古屋経由でなんとか横浜の自坊に帰

ることができました。家内と長男は電車の中に二時間以上も閉じ込められ、その後、一時間ほど歩いて自宅に辿り着き、小学校にいた次男は、親の迎えが叶わず、安全のため先生や数人の同級生と教室で一晩を過ごしました。私の周囲に起こった真に些細なことを記したのは他でもありません。遠く三陸沖で発生した地震の影響がそれほど広範囲に及んでいた一端を知ってもらうためです。

今回の大震災はマグニチュード九・〇を記録しました。歴史に残る大正十二年の関東大震災は七・九、記憶に新しい平成七年の阪神大震災は七・三です。マグニチュードの数値が二増えると地震のエネルギーは千倍になるといいますから、今回の地震の桁外れの規模が如実にうかがえます。「千年に一度」と指摘されるのも実感として頷けます。営々と築き上げてきた近代文明を一瞬の内
に破壊し尽くす自然の猛威は、その強大さと反比例して、人間の力の脆弱さをあらためて知らしめることとなりました。

今回の震災報道を通じて、この数週間、しばしばマスコミで取り上げられたのが、元暦二（一一八五）年七月九日、京の都を襲った大地震です。『方丈記』の中で鴨長明は「元暦二年に大地震があった。その被災は尋常ではなく、山が崩れて川を埋め、海が傾いて大地を浸した。地面は裂けて水を噴き出し、岩は

割れて谷底に転がり落ちた。舟は流されて浪を漂い、馬も足場を失うありさまであった。都周辺の至る所で無事な建物など何一つなく、家屋の倒壊で立ち昇る土埃はあたかも火事の煙のようであり、大地の揺れや家屋が倒壊する音はまるで落雷のようである。家の中においても忽ち潰つぶされてしまいうしろし、外へ走り出てもあたり一面で地割れをしていて危険この上ない」（筆者試訳）とその惨状を伝えています。

元暦二年は大原問答の前年にあたり、法然上人もまたこの大地震に遭われ、その惨状を目の当たりにされたことでしょう。こうした経験を踏まえられた法然上人だからこそ、冒頭のご法語を通じて、私たち念仏行者は、この世の無常と人の命の儚はかなさをしっかりと自覚し、浄土往生の志を決して失わないようにしつつ、人としてこの世に生を享けたことの有り難さを肝に銘じて、自暴自棄になつて再び迷いの世界に舞い戻らないよう、しっかりと前を向き、力強く生きていくことの大切さをお示し下さったのであります。

こうした法然上人のご法語を胸に刻んで、私たち一人々々に与えられた役割と果たすべき使命を着実に実践していくこと、この未曾有の震災を乗り越える術は、そうした地道な精進以外、見出せそうにありません。合掌

（林田康順）

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第二十三回

第二部

ライン
来江の古城遥かなり

自由思想団で弁じ
僧院で禅味を楽しむ



象牙の塔の 研究室から巷へ

ストラスブルクを代表する宗教行事であるマリア祭を体感したことで、渡辺海旭ははからずも実践的な、生きた比較宗教研究に目覚めることになった。ロイマン教授をはじめ世界的な比較宗教学者に師事し、サンスクリット、バーリ語、チベット語などの原典にあたりつつ、文献をきわめ、ときに原語の経典をドイツ語や英語にも翻訳し、多くの論文を発表することに打ち込む研鑽の日々だったが、海旭自身は象牙の塔に籠もる書齋学究の徒でありつづけることには満足できなかった。

マリア祭によって、異郷の地で異教の人々と交わり刺戟をしあうことの意義を知ってからというもの、海旭は研究に倦むと、ふと研究室から街へ出る。そこで、無神論者をふくむさまざまな宗派の人々と出会い、エネルギーを吹きこまれ、研究室にもどると、以前よりももっと熱情をもって、比較宗教の研究に打ち込むことができる。海旭は留学生生活を重

ねるにつれ、このやり方が、一見無駄なようにでいて、実は有用であることに気づくようになった。

そもそも海旭は、幼少時から、勉強好きであると同時に大の人間好きであった。幼少時からつちかわれたこの作風が、留学生生活でも発揮されたというべきだろう。当時日本からの海外留学生は、夏目漱石のロンドンでの自閉症は極端にしても、多くはその重責から、閉じこもりがちで、それが視野と交流を狭めて、留学の本来の目的を果たせないでいた。その点、海旭は異例といつてよかった。海旭は忙中に閑をぬすんでは、生きた比較宗教研究を実践、というより、気がつくところに出て人々と交わっていたというのが正直なところだった。すでに述べたように、ストラスブルクは、ヨーロッパの十字路であり、新旧キリスト教徒をはじめとする諸宗教を実践的に比較研究するにはうってつけの地であった。

自由思想団で

「坊主党」を断ず

海旭は、もちまえの行動力と人懐こさで異教の人々と交わったが、生きた比較宗教を体感し知見をひろげるのにもっとも役に立ったのは、自由思想団に参加したことだった。自由思想団とは、この時期ドイツやフランスなどヨーロッパの先進国に生まれた言論集団で、宗教を偏見にとらわれることなく自由に語ることができ、参加者は無神論者だけでなく、社会主義者や唯物主義者、原始キリスト教徒、キリスト教革新派などまさに種々雑多。これもまた生きた比較宗教学の「知の闘技場」であった。

海旭はこの自由思想団の自由闊達な作風が、留学直前に高島米峰ら宗教界の革新に燃える若手仏教徒とともに立ち上げた「新仏教同志会」に似ていると感じ取って、高島にこう書き送った。

「われらが新仏教同志会とこの地の自由思想団とは、「討究の自由と宗派の容認」という点で大いに似通っている。ひとつ違っているのは、自由思想団では学者とか知識層の人は

少ない。世俗の実業で汗をかいている人が多数派を占め、それも社長ではなく、たとえば電車の切符切りとか車掌とか郵便配達とかがかなりいて、それが堂々と宗教やら哲学やらには時事政治の問題に実に熱弁をふるってやまない。これはドイツの社会教育の結果でもあるが、日本の教育の貧困のせいにするのではなく、わが新仏教同志会も先頭になって、伊勢屋の旦那、勉強堂の番頭はもちろんのこと、車屋の八つつあん、土工の熊さんなんかもどしどしやってきて、意見を吐くようにならないといけない。われらのような坊主上がりや雑誌や演説使いの有象無象の面々、議論好きの犬天狗や小天狗がやれ俺の言説がすごいのだのと鼻競べをやってるようでは、先が知れている……」

すると高島からは私信で「渡辺、きみは無神論に宗旨替えをしたのか」と茶化されたが、海旭の肩の入れようは大変なもので、自由思想団の会合にひんぱんに出入りしては人脈をひろげた。

ある日の夜にもたれた会合でのことだ。ドイツの温泉地として知られるヘッセン州都ヴイースバーデンで活動する「旧教自由教団」なるカトリック革新派の活動家がビラを撒いているのを見つけた海旭は、たちまち入魂になって、会がひけたあとビールを酌み交わしながらの交歓となった。

海旭はいきなり言った。「きみたちには、大いに頑張ってほしい。教皇主義を根本から改めることができれば、それこそひとり旧教教会のためばかりでなく、人類社会の幸福だ。日本の各宗門内においてもどしどしこんな革新運動がおこって、本山主義、法主神聖主義の根本革新がなされてほしいものだ」

後段の日本のくだりに、革新派がきよとんとするのに気づいて、海旭は苦心しながら補足説明をしたが、正しく伝わったかどうかは定かではなかった。

やがて議論はこの間（明治三十八年）行われたドイツ帝国議会選挙の結果に及んだ。この選挙では、ビスマルクの失脚以降、社会的

弱者の擁護者として勢力を伸張してきた社会民主党が敗北、かわりにカトリック勢力をバックにした守旧派の中央党が得票率十九％で二十六％の議席を占有して、第一党に躍進した。これについて、かねてから社会民主党びいきというより、大のカトリック嫌い（より正確に言えばカトリックの政治主義嫌い）の海旭はこう断じた。

「今回の選挙結果について、国民精神の発揚、愛国観念の成效だという輩もいる。いったいどこがそうなのか。保守党の家族素封家連、自由党の銀行家と官学の教授連は多めにみてやってもいいが、許せないのは中央党だ、狂信、圧制、狭量で自由主義の大敵であるローマ教皇の意のままの坊主党だ。これがドイツ国民精神の精華というのなら、反カトリックのルーテルやゲーテやカントの墓を暴いて、その屍をスイスの湖中にでも叩き込むがいい」

そこまで過激に言われて、さすがのカトリック革新派は、とまどいながらも返した。「そこまではつきり言われるとは、われら革

新派もかたなしだ。きみには、いつかうちへ指導にきてほしいものだ。ところで、われら共通の敵役である教皇派カトリックだが、たしかにドイツでは勢力を伸張しているようだが、お隣りのフランスでは対照的だ。クレマンソー内閣になってからは、ローマ教皇とは距離を置きはじめ、カトリックは哀れをとどめている。ローマ教皇はフランスのカトリック神父どもから毎日何百通の無心の手紙をもらうそうだ。助けてくれと。信徒の喜捨や布施ではとても暮らせない、と泣き言が書いてあるそう」

海旭は大きく頷いて言った。「それはめでたいことだ。フランス国民もようようカトリック坊主の本質に気づいて、金をやって贅沢をさせてやるほどお人よしではなくなったらいい。まるで幕末維新のわが伝統仏教と同じではないか。けっこうなことだ」

またまた幕末維新うんぬんの意味がわからずきよんとする革新派に、海旭はおかましくなくつづけた。「まあ、日本の体制転換と伝

統仏教の話はあとで説明するとして、この間の、オデッサにおける言語に絶するユダヤ教徒迫害について、きみら革新派の評価をききたい」と海旭は舌鋒の矛先を変えた。

オデッサの虐殺とは、この年ロシアは黒海の貿易都市、オデッサで起きたボグロム（ユダヤ教徒排斥運動）で、その犠牲者は二千人とも三千人ともいわれた。背景には日本との戦争に負けたことによる社会不安があった。海旭はつづけた。「これがギリシャ正教を国教とする人民のなせる所業と思うと、キリスト教の感化というものに深い疑念をいだかざるを得ない。バーソロミューの虐殺以来、キリスト教の残忍さはどうだ。憐れむべきはユダヤの民だ、手足を切られ、舌を抜かれ眼を抉られ、老幼婦女が生きながら焚かれる地獄絵だ。ところが、ヨーロッパのキリスト教徒ときたら、懺悔をし、無辜の老幼婦女に涙をそそぐものはない。これは、いったいどういうことか」

「たしかにユダヤ教徒については、ワタナベ、

君のいうとおりだ。歴史的な経緯もあり、プロテスタントも、カトリックのわが革新派ですら、どこかで見て見ぬふりをきめこんでいる」とうなだれる革新派に、海旭はユダヤ教徒擁護論を展開しはじめた。

「どう考えても、ユダヤ教徒への差別は納得がいかな。ここドイツ帝国の『国教』はプロテスタントだ。そして『教長』は言わずと知れたカイゼル（皇帝陛下）だ。その地上の代官たるカイゼルの上に、イスラエルの族長の神であるエホバを置いているのがけしからん、ドイツ帝国の国体にとって害があるという論法だ。そういうなら、カトリックも同じではないか。カイゼルの上にローマ教皇を置いておる。しかし、そのことで、カトリックはドイツ帝国に害をなしたか。ユダヤ教徒は非国家的な悪行をなしたか。ライン以南のカトリックのカイゼルへの忠愛も、ユダヤ教徒の文化への貢献も、ベルリンのプロテスタントと変わらぬではないか」海旭はうなだれて聞き入る革新派の顔を覗きこんで言った。

「はつきりいおう。キリスト教徒以外は犬か豚のように考える不寛容をそろそろ棄てるときではないか。自由で寛容なキリスト教に変わるべきだ。でないと、もっとひどいユダヤ教徒迫害がおきそうな嫌な予感がする。それはユダヤ教徒にとっても、きみたちキリスト教徒にとっても大いなる不幸だ」

「なるほど。正論だ。頭がいたい。異教徒であるからこそ、よく見えるのかもしれない。今夜ほど異教徒であるきみをうらやましく思ったことはない。新旧をとわずキリスト教徒は、大いに傾聴すべしだ。きみの寛容なる議論に敬意を表して最後にビールで乾杯しよう」と革新派が総括したところで、その夜の議論はおひらきとなった。

海旭は、ビールをぐいと飲み干しながらつくづく思った。これが日本だったらここまで踏み込んだ宗教問答ができるだろうか。やはり留学してよかった。そして自由思想団のような集団に出会えてよかったと。

アルザスの牧師館を弔問す

しかし、海旭は自由思想団とばかり付き合
って、夜な夜な口角泡を飛ばしていたわけ
ではなかった。仮に、相手が革新派には肩入れ
できずに「坊主党」の側に重心をおいている
カトリック教徒でも、あるいは万事に保守的
で消極的なプロテスタントでも、だからとい
って相手にせずではなく、教団と信者とは区
別して、あくまでも人間本位でやわらかく付
き合う。これが海旭流であった。宗教問答ば
かりが兼学ではない。交流するうちに、家族
ぐるみ、教会・修道院ぐるみの付き合いにま
で発展し、そのなかから生きた宗教の実相を
つかむことができ、海旭の宗教観を豊かにし
てくれた。

新旧キリスト教の友人との交遊から一例ず
つを紹介しよう。

あれは留学して五年ほどたった年明けの某
日、前日からの大雪がようやく已んだ夜だっ
た。古くからのプロテスタントの友人の夫人
が亡くなったとの知らせをうけた。その友人

はストラスブルクから電車で二時間ほどのアルザスの小都市で牧師をしていた。海旭は、翌日いつもより早く起きると、部屋で夫人を弔う経を上げて勤行をすませから、朝一番の電車に乗って弔問に訪れた。牧師には四児がいた。海旭は子たちのためにこの季節のストラスブルク名物、焼き栗を持参し、うち沈む友のために、半日は牧師館の書斎とともに過ごした。

「仏教では、無常生滅の理というが、まさにこの世とは大夢をみているようなものだ」と海旭は慰めの言葉をかけた。「たしかに理不尽には思えても、天意が空しいはずがない。必ずあまねくすくつてくださる。過ぎにし方ではなく、これからを見つめて歩こうではないか」キリスト教徒の牧師を仏教徒の僧侶が慰撫し、それを牧師は素直に受け入れ深くうなだれてひたすら聞き入っているさまに、海旭は感動を覚えた。

ドイツの厳冬期は夜の訪れが早い。日中でさえ弱々しい陽の光が薄れてきたので、ぜひ

夫人の墓に詣でたいと申し出ると、異教の友はそれを諾として、案内してくれた。遙か遠くに見晴るかす雪をいただいた連峰から、凜々たる寒風が吹き降ろすなか、二人は半ば凍ったラインの支流の溪谷をわけいった。二人の気配を察知して、林から川鶉が力なく飛び立つと、周囲は静寂につつまれる。聞こえるのは、二人が押し黙って雪道を踏みしだく靴音だけだ。やがて墓所にたどりつき、門をくぐると、雪の中から紅や紫の花が添えられた墓があり、それが夫人の新墓と知れた。海旭は墓にかかった雪を掻き退け、持参した花輪をかけると、数珠を取り出して、しばし法句経を誦し、十念を微唱し、しばらく黙禱を捧げた。

牧師館の書斎での慰撫と同じく、異教の友は、異教徒による異教の弔い方を受け入れて、傍らにただ黙って立ち尽くしていたが、やがて閉じた両眼からはらはらと涙が流れおち、ついにこらえきれずに嗚咽をもらしながら声を上げて泣き出した。

海旭ももらい泣きをしながら、夫人の死がちょうど降誕祭にあたっていたことに気づいて、友に囁いた。「思い切り泣きなさい。泣いていいのだ。さぞやつらかっただろう。降誕祭ではたくさんの信徒を前に説教やらお祈りやらと儀式があつて、妻のために泣くわけにもいかなかった。こらえにこらえて、ずつとしのんできたのだらう。さあ、ふたりできみの令閨れいけいのために、ここで思いっきり泣こう、さあ泣こう」

留学生活で葬儀には何度も立ち会ったが、日本の弔いとはちかつて西欧人がここまで喜怒哀楽を露わにするのをみて、宗教の根底にある共通したものを実感させられた。

海旭は最終の電車で下宿へ帰りつくと、読経をすませて、机に向かうと、日記にこう記した。「我らの涙は、基督教と仏教との境界を融け去った。独逸人と日本人との区別をも融け去った。ふたりは同情海中の人となつて、時間の経過もわすれ、あたりが暗くなるまでただただなき濡れた」

(この項つづく)

浄土誌上句会

●時刻表

〈特選〉春昼の枕に薄き時刻表

うらうらと眠くなるような陽気である。午後のひととき、ちよつと横になりたくなつて、時刻表を枕がわりに置いたが、大版の分厚いものでも、頭を乗せるにはどうにも薄い。誰にも覚えのありそうなことである。

井口 吾郎

〈佳作〉雪国の駅森閑と時刻表

時刻表写し受験の子が走る

河合富美枝
石原 新

時刻表覗き遍路ら素通りす

浜口 佳春

●雅楽

〈特選〉CDの雅楽止みたる雛の夜

雛祭りである。雛の歌から始まつてにぎやかに日が暮れた。子供たちの寝たあと、CDでゆつくり雅楽を聞きながら、盃を傾けてい

内藤 隼人

たのだろう。今はその音も止んだ。灯を消せばあとは雛たちの世界である。

〈佳作〉

雪囲いといれば漏れくる雅楽の音

佐藤 雅子

奈良の春雅楽で終わるパチンコ屋

井口 吾郎

神宮の奉能雅楽小雪降る

斉藤 幸雄

●自由題

〈特選〉

手術室余寒の扉重く開く

増田 信子

手術の日である。早目に出ていろいろ指示を受ける。時が来て手術室の扉が静かに開いた。手術を受ける身には、その音が重々と感じられたのだろう。重く閉じられると、あとは医師に任せるしかない。まだ肌寒い。

〈佳作〉

啓蟄やトランプ出して鳩出して

金井 楨

朝寒や吾に寄りくる散歩犬

山口 信子

春の汐つばさ平らに鳶舞いぬ

一丁田美恵



浄土誌上句会のお知らせ

兼題

季節ではありません

鉄柱 群青 自由題

誌上句会〈編集部選〉

■時刻表

現し世も彼の世も霞み時刻表
卯浪立つ清張駆使す時刻表
牛蛙鳴くや分厚き時刻表
遅日かな汐の香のする時刻表
時刻表から初蝶のはばたきぬ
時刻表に急須の轍夕永し
春の雪一番ホームの時刻表
あたたかや時刻表やら小銭やら
梅林を出て路線バス時刻表
鞆には春のシヨールと時刻表

佐藤雅子
中島富士子
村田 篠
井草芳郎
小林苑を
金井 楨
三宅月彦
西原規夫
鍋谷宗治
柄本圭子

締切・二〇一一年五月二十日
発表・『浄土』二〇一一年七月号
選者・増田河郎子(『南風』主宰)
応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

■雅楽

元朝の森に雅楽の遠音かな
山開く雅楽の奏す越天楽
序破急のありて雅楽と春の風
春水に渦あり雅楽始まれり
みな人の春を纏いて雅楽かな
梅咲けばNHKから雅楽かな
雅楽舞うごとくに蛇は穴を出る
境内に雅楽洩れきて春の雪
若葉山奥に鎮座の雅楽殿
参道は雅楽流るる芽木の風
入堂の雅楽めでたし春の婚

河合富美枝
中島富士子
斉田 仁
村田 篠
井口 栞
工藤 掉
山内桃児
柄本圭子
浜口佳春
石原 新
相川祐司

■自由題

大漁の声さかのほり二日富士
白粥に蒟蒻増少し写経会
寒の空明治生まれの尊師近く
涅槃会や寒月冴える夜半かな
湧き水に添うが如くに花筏
落椿しばらく水の皺の上
つぶやきのやうな雛のおはしけり
霊園を横切る春の消防車
山小屋に炭焼く人の無精ひげ
節分の豆の残りし靴の中
今は着ぬ着物で作る雛人形

河合富美枝
中島富士子
佐藤雅子
飯島英徳
森 懐人
斉田 仁
村田 篠
工藤 掉
中村真一
村上青女
井村善也

さっちゃんね

80 かい目

かまち♡ひろう



かまちよろう先生作新聞四コマ漫画「ゴンちゃん」が各地方新聞に掲載されています。(静岡新聞・山梨日々新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日々新聞・新日本海新聞・山形新聞・長崎新聞・岐阜新聞・以上朝刊。中国新聞・神戸新聞、以上夕刊)



編集後記

わがままに冷夏を願う街の人 岱潤

今回の大災害が四月の初めに東日本大震災と正式に命名された。その規模と大きさは他と比べるものではなく、また不幸にして起きてしまった原子力発電所の事故はレベル7と、チェルノブイリと同レベルと判断されるまでになってしまった。かつて経験したことのない、とんでもない状況に今日日本は置かれている。

道開かれ我も旅人春の雪 不知詠人
こんな句が目に入った。どこに行けば安心できるのか、どのようにすれば人の力になれるのか、もどかしい毎日が続く。宗門では、総・大本山で予定していた

八百年の大遠忌法要を全て延期した。お祭りムードは日本から消え、自粛の風が吹き荒れている。今確かに「悲の心」が日本中を覆っている。これはこれで素晴らしいことだと言える。しかし何でも自粛して日常の生活を行わないのは、決していいことではない。みんなが元氣を取り戻して、不安や恐怖に打ち勝つことも大事なことだ。

『方丈記』に書かれているような、大飢饉で死体が京の町に並んでいた様子を法然上人もご覧になっていたことだろう。上人はお念仏を称えながら、そして心の弱い人には「常に念仏してその心を励ませ」とおっしゃっている。

雑誌「浄土」
特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
北山大超(焼津・光心寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(芝・天光院)
脇 博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山・光明寺)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>

今こそお念仏なんだと強く思う。八百年御遠忌のこの年、私たちは大変な試練を味わうこととなった。今こそお念仏を称え心を励ましたい。(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤光道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

七十七巻五月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十三年四月二十日

発行 平成二十三年五月一日

発行人

編集人 佐藤良純
大室了皓

印刷所 株式会社 シーディー

〒一〇五〇〇一

東京都港区芝公園四・七・四明照会館内

発行所

法然上人鑽仰会

電話 〇三(三三七八)六九四七

FAX 〇三(三五七八)七〇三六

振替 〇〇一八〇・八・八二八七

小松谷正林寺

正林寺は浄土宗寺院。京都市東山区渋谷通東大路東入3丁目上馬町。もとは内大臣平重盛公（小松殿）の別邸。48の灯籠を点じ念仏行道された道場、灯籠堂のあったところでしたが、平家没落の後、関白九条兼実公の山荘となりました。月輪御殿造営の際、ここに招かれた法然上人は、兼実

公の戒師として法談をし、これを静聴した兼実公は剃髪出家することとなります。法然上人は一時、居住もされたようで、元久2年（1205年）8月、法然上人が瘡（おこり）をわずらったとき、聖覚上人が修法を施したといわれています。

建永2年（1207年）3月、法然上人、讃岐流罪の折にもこの御房から出立されたと伝えられています。



法然上人鑽仰会の

本

当会発行の書籍、雑誌
のお求めは、当会へ直接
お申し込みください。

なお、月刊『浄土』を除き送料は
含まれておりません。別途実費を
申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話／03-3578-6947

FAX／03-3578-7036

こうるじっぽう 響流十方

其の二

袖山榮輝・林田康順・小村正孝

法然上人鑽仰会

響流十方こうるじっぽう
其の二
640円(税別)

響流十方こうるじっぽう
600円(税別)



月刊『浄土』
バックナンバー



『念佛讀本』完全復刻版
1,600円(税別)



「法然上人絵伝絵葉書」
(8枚セット)500円(税別)



※浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠二巻本」より